

## 批評と紹介

ジャック・ジェルネ、呉其昱共編

## ペリオ将来敦煌漢文文献目録

## 第一卷 (P. 二〇〇一—二五〇〇)

池田 温

スタイン、ペリオ等により敦煌石室に一千年近く封蔵されていた敦煌文献が歐洲にもたらされ、世界の東洋学界に一大センセーションをまきおこしてからすでに六十数年の歳月が流れた。ロンドン・パリ・北京・レンングラードの四大蒐集のほか、中国・日本などに散在する敦煌写本の目録編製は遅々たる歩みをたどってきたが、陳垣らの「敦煌掇瑣録」(一九三二)、ライオネル・ジャイルズの「大英博物館所蔵敦煌漢文文献解説目録」(一九五七)、エル・エヌ・メンシコフ等の「アジア諸民族(現名は東洋学)研究所敦煌漢文文献解説目録1・2(未完)」(一九六三、六七)につづいて、パリの国立図書館所蔵のペリオ本についていよいよ本格的目録の刊行をみたことは、敦煌資料に関心をもつ研究者にとつて大きな朗報である。実はパリの本目録刊行は十数年前から予告されてお<sup>(1)</sup>り、校正刷を目にした日本の学者もあつたので早くから

期待をもたれていたが、一九七一年秋来日されたジェルネ教授の手からその高雅なクリーム色フランス装の一冊が東洋文庫に寄贈され、多年の渴望がいやされる感を覚えたのは筆者一人にとどまらないであらう。

本目録の完成刊行に大きな役割を果したパリ国立図書館写本部東洋掛主任司書マリー・ロペルト・ギニャール夫人の十三頁におよぶ序文に、ペリオ敦煌文献の由来と性格、その価値、外形、目録作製の経緯などが詳述されているので、それを参照しつつ若干の前置を述べておこう。スタインに約一年おかれて一九〇七年暮に敦煌に到着したペリオは二ヶ月余にわたる石窟調査のち、遂に宝庫の鍵を手にした。

三月三日(カーニバル祭の最終の火曜)私はその神聖な部屋に入ることが出来た。私は啞然とさせられた。この書庫から人々が八年間にもわたつて持出していたのだから、うんと減つているものと信じていた。ところが約二米半四方の龕室に、三方にすつかり人の背丈ほど二列、時には三列にもなつて巻物が積まれ充滿しているのを目にした時の私の驚きをご想像下さい。

二枚の板夾にはさまれた大型のチベット写本が一角にためこまれていた。他方では漢字やチベット字が積まれた束の端からのぞいていた。私はいくつかの包みを開けてみた。写本は大部分断片的で首・尾を欠き、中央で破れ、時

には一つの標題だけにまでちぎれている。しかし私が読んだ年紀はみな十一世紀より前のものであり、この最初の試探でブラフミー字やウィグル字の貝葉型写本がみつかった。私の考えはきまつた。まずこの書庫が全部でどれだけのものか調べねばならぬ、それから方針が生まれよう。そこにある一万五千〜二万巻の巻物を一つ一つ端から端までくりひろげて見るとなると、想像を絶すること六ヶ月かかつても終るまい。しかし私はともかく全部を開けてみて、夫々の本の性質やそれが我々にとつて新しいものを提供する可能性があるかどうか知らねばならぬ。それからそれらをクリームとグラタンに、すなわち一方はいかなる犠牲を払つても譲れぬもの、他方は入手しようと思つても場合によつては放棄するも止むを得ないもの、とに弁別する必要がある。

私は刻苦精励したが、この鑑別には三週間以上かかった。はじめの十日間、私は一日当り千巻以上を片付けた。これは記録になりましょう。竈室にうずくまつて一時間に百巻、文献学者の仕事というより自動車競技者の速度だ。その後はスピードが落ちた。……全体として私はめぼしいものを見落したとは思わない。ほんの一卷といえども、紙のきれはしに至るまでいろいろなボロがあつたことを神はご存知だが―手でかきまわして見なかつたものはなく、私

が方針をきめた範囲内のものを何一つやりすごしたりはしなかつた。……

私にわかつたことは、贈り物とされた相当の教にもかわらず、又同学スタイン氏のたちよりがあつたにもかかわらず、殆ど大部分の書類の束はいわばまだとじられたままで手がついておらず、一言でいえば九世紀以上も石窟内に打棄てられたままの状態であつたのだ。(一九〇八年三月廿六日付エミール・スナール宛書翰より抜粋)

三十歳の碩学によるこうした超人的な電覽選択の結果、ペリオ蒐集は他所の敦煌資料に比し、漢文以外の諸語文献及び漢文と胡語の両語文献の割合が多く、漢文文献中では仏教文献以外の道教や經史子集の書及び文書の比重が大きく、さらに漢文仏教文献の中では跋を付したものの割合が多い、という特徴をもっている。すなわち総量では石室藏書の二割以下を占めるにすぎぬペリオ蒐集が、質的に敦煌文献の精華を最も多く含んでいるといつて決して過言でないのである。

ほとんど古写本・古文書を伝存しなかつた中国において、これら敦煌文献が中古の実物資料としていかに画期的貢献をもたらすかは多言を要しない。その内容的研究についてはしばらくおき、書物の外形の歴史を知るにもそれはかけがえのない資料である。敦煌文献の用紙の材質鑑定が序文に紹介されているのによると、スタイン本を調べたクラパートン氏が

楮(カジノキ *Broussonetia Papyrifera*) 桑の類の鞣皮、コウゾも同属) 或いは楮と苧(ラミー)の纖維の混合とした点は、ペリオ本の近年の分析によつても追認される。すなわちペリオ写本から剝がされた後期に属す補修紙片からとつた標本の顕微鏡検査を行つたフランス国立科学研究所のフリーデル夫人も楮の纖維の優越を認め、又ダラムシユタット工專付属纖維化学・木材検査研究所長ヤイメ博士らが、ペリオ本中の蔵文八写本と漢文十三写本からとられた紙片の顕微鏡的分析を行つた結果も、楮纖維の優越を強調し、同時にジンチョウゲ科(ミツマタの類)・大麻・苧の細い纖維やくだかれたボロが加わつてゐることを指摘する。殆どすべての紙は米の澱粉でぬりかためられた痕跡を認める。ただ純粹の楮紙はその植物自体の液のために、のり無しで墨が散らない。全体として、八世紀半ばまでの薄く滑らかで丈夫な、筋の多いきれいにスキ目の入つた紙が、安祿山の乱及び吐蕃の占領による中国内地からの物品供給の杜絶により、以後は厚く不規則でしまりのない、細孔のある荒いスキ目の紙に変つてゐる。我國の藤枝晃・石塚晴通・上山大峻・菊池英夫氏らも敦煌資料等の紙の研究を進められてゐるが、所蔵機関の組織的検査にまつ所が大きいだけに、パリのスタッフがこころした分野に深い関心を示していることは大変心強い。なお卷子を十本宛つつむ帙の立派な実物が五点(竹製三点・絹製二点)、ペリオによ

りギメ美術館に齎されてゐることも申しそえておこう。

さて一九〇九年末に帰国してから、ペリオは敦煌漢文写本の略目を作りはじめ、第一次大戦による中断を経て一九二〇年に一段落したらしい。この目録はルーズリーフ式の紙のおもてに複欄あるいは単欄に彼自身書いたもので、後に見出し用の爪を付けまゝとめて製本され灰色布装の一大冊をなしている。彼の歿後一九四五年に書類中からみつかったP三五一二〜九二番の注記を付加しペリオ目録は完結をみた。本目録は公開されず、エドガール・プロシエの手になるやや不完全なうつつしが、国立図書館写本部東洋室の備付カタログとされてゐた。この備付カタログのタイプコピーは羽田亨氏により我國の東洋文庫や京大にもたらされており、又その漢訳が羅福萇・陸翔氏により二種刊行されて、その内容は学界周知である。この目録は二〇〇一〜五五四番(但し四一〇〇〜四四九九、五〇四四〜五五二番欠)を含むが、若干の欠番のほか数百の文書について全く記事を欠いており、三〇〇点余の書籍の書名比定がなされてゐない。なお両語文獻の多くが漢文文獻中に含まれるが、漢文文獻の編号をもつと同時に蔵文等の番号を付されたものも少くない。それら非漢文部分については、蔵文はマルセル・ラルーの目録<sup>(9)</sup>、コータン文はハロルド・ベイリーの著書<sup>(10)</sup>、ソグド文はエミール・パンヴニストの著書<sup>(11)</sup>を参照する必要がある。

京都大学文学部東洋史教授の那波利貞氏は一九三二～三年のバリ滞在中、三五二一～五五四一番（欠番多し）につき仏文で簡潔に記した、ペリオオ目への追補を作製した。<sup>(12)</sup> ついで国立北平図書館司書の王重民氏が一九三四～九年に交換図書館員として滯仏、ペリオ漢文文献の目録編成に努めた。彼の目録は帰国時に二〇〇一～二四八八番までの部分が引渡され、後に一九四六年に至り二四八〇～四〇九九、四五二六～四六四九番（欠番多し）の原稿写真が送付されてきた。この王重民目は漢訳補訂されて、一九六二年「敦煌遺書総目索引」に収め刊行された。<sup>(13)</sup> それには二〇〇一～五五七九（欠四一〇〇～四四九九、五〇四四～五五二一、他二八件）番が含まれ、なお彼の四部書に関する詳しい注記は「巴黎敦煌殘卷叙録」（二冊、一九三六、四一）として刊行され、後に他の中国文学者の注記とまとめて「敦煌古籍叙録」（北京商務印書館、一九五八）の形で出ていることは周知の通りである。又第二次大戦後一九五一年にハーヴァード大学の楊聯陞教授が、五五四三～五五九〇番の注記を同館の為に作った。

ジェルネ・吳両氏共編の本目は、ペリオ・王重民両目の基礎の上に作られたもので、一九五二～五年にかけ、当時フランス国立科学研究センターのアタシエであつたジェルネ氏（現在パリ第七大学教授、東亞研究所長）と同所の技術協力者であつた吳其昱氏（現在同所研究員）により、二〇〇一～

二五〇〇番の目録タイプ原稿が作製され、その業績に対し一九五七年金石文芸アカデミーのバジエット賞が与えられた。一九五五年以降、ギニヤール女史の指導下に国立図書館の目録方式に準拠して写本の細目の補充的記述が加えられ、これにはマリー・ローズ・セギ嬢が当り、一九六一年からはエレンヌ・ヴェチ嬢もこれを助け、吳氏も作業を分担した。本目で細字に組まれている書写・字体・行数・字詰・紙質・スケール・保存状態等の詳実をきわめた注記がこの作業の成果に他ならない。

ペリオ蒐集漢文文献の統計は現在次の通り。

P 二〇〇一～四〇九九	二〇九九点
(四一〇〇～四四九九)	欠番)
P 四五〇〇～五〇四三	五四四点
(五〇四四～五五二一)	欠番)
P 五五二二～五五九六	七五点
但しP 四五二四・四五二七・四五二八の三点は一六七文書を含み、又P 四五二五等計廿一点も三一五断片に再分類される。	四八二点
補修紙片等が原巻から剝離され pièces (付属片) とされるもの	約七〇〇点
総計	約三九〇〇点

この点数は、新しい剝離や断片の接合等将来の研究による

修正により変更され得るが、およその目安にはなる。

ペリオ将来本は、一九一〇年に金石文芸アカデミーの意見に従った文藝美術相の決定によりすべてパリ国立図書館写本部に入れられた。そこですべてに Doublon の同館印が捺されている。入館後ペリオの要求と写本部長アンリ・オーモンの仲介で、ルーヴル美術館の修繕掛がその洗浄、しわのぼし、修復に当つた。ずつと後に国立図書館の修繕室が改良されてからそこで補修が続けられ、王重民は男女の修繕掛と親しく作業を共にした。そこで文字面を粘り合わされている写本がはがされ、又裏うもの糊紙や、破損の補填紙として書写された故紙が貼付されたものを丹念に剝離する操作が行なわれた。この結果右掲の如く約七百点の page が加わつた他、ペリオ目の欠番がこれら新加断片でかなりうめられたのである。他方本来一連のものがバラバラに分散したものは、接合して原型に復すべく修復された。<sup>(15)</sup>

かような剝離・修繕の結果、単に点数が何割も増加したばかりでなく、写本の様子が旧時の写真や記録とかなり異なるものを生じた。

一九五五年以降、左景權氏（国立科学研究所技術協力者）が剝離された細片の鑑定を助け、又一九六七、六九年にパリを訪れた我国の兜木正享（立正大）・井ノ口泰淳（龍谷大）両氏も数百点の断片（仏教文献）の比定に当つた。か

ようにペリオ本についてはなお整理工作が続けられているのである。

さて本目録は番号順に記述されるが後半に詳しい索引があり、その分類項目は左の如くなっている。

### I 仏教

- 1 経律論（大藏経所収）
- 2 大正藏経第八五卷（古逸・偽似部）所収
- 3 経序・後記・進経表
- 4 経註
- 5 律註
- 6 論註
- 7 その他の仏典註
- 8 仏教著作（a 教論・隨筆・綱要 b 禅籍 c 語解 d 文学的作品・小説・逸話・伝記等）
- 9 偈・詩篇
- 10 ダラニ
- 11 仏名
- 12 仏事文献（a 諸仏事文集 b 諸齋文 c 諸願文・念仏文 d 讚文 e 懺悔文 f 發願文 g 受戒文 h 亡文 i 講演 j 書式集）
- 13 讚文
- 14 死者讚文

- 15 仏教関係ノート
  - 16 仏教関係断片
  - 17 未比定仏教文献
- II 道教
- 1 道藏所収道經
  - 2 道藏未収道書
  - 3 道經序
  - 4 道經註
  - 5 道教編纂物
  - 6 占星
  - 7 道經目
  - 8 未比定道教文献
  - 9 儀式誓約、受戒供養
- III 其他文献
- 1 儒教經書
  - 2 史書
  - 3 地誌
  - 4 言語(韻書・語彙・辞書・教科書)
  - 5 詩
  - 6 文学
  - 7 宗教・哲学論
  - 8 序文

批評と紹介 池田

- 9 死者祭文
  - 10 官文書
  - 11 書翰(書儀を含む)
  - 12 転帖
  - 13 経済・法律文書(契・会計簿等)
  - 14 計量・算術
  - 15 医書
  - 16 目録・リスト
  - 17 習字
- さらに書名・著者名及び解説に指摘された人名すべて、地名・職官名等を含むアルファベット索引があり、又特殊事項索引として以下が付される。
- 1 跋
  - 2 年紀
  - 3 年号
  - 4 絵画
  - 5 素描・図案
  - 6 漢語以外の言語文献
  - 7 印刷物
  - 8 印章
  - 9 護符
  - 10 則天文字

11 避諱文字

12 異体字

13 唐以前の筆跡・優れた書・小字・大字・金字・草書・塔形文字・左行書

14 スキ目の整つた良質紙・紙質の均一な良紙・黒紙・美紙

15 特別な装釘・折本・冊子・原軸・紐

これら諸項が夫々何番に該当するかただちに検索できるよ  
うになつていて大変便利である。なお巻末には廿四頁の図版  
があり、計四二点の跋文（本目所収分に付された跋全七二件  
の過半になる）のすこぶる鮮明な写真が掲げられていて原型  
をしのぶよすがとなる。

ここで目録本文を一二点訳してみると左の如し。

二〇〇一 南海寄歸内法傳〔義浄〕序全文と巻一、大正蔵経

No. 一一二五、第五四卷二〇四頁下段―二二二頁上段。

丁寧な細字で字画は整う。行間に若干脱字を補入（最初  
の紙葉は朱、後は墨）。毎葉廿四〜廿八行、毎行廿七〜卅  
字。細字注（単行或双行）。上下端に界なし。上方余白一  
〜一・五糎、下方余白〇・五〜一・二糎。全十五葉、うち  
十四葉は幅三四・七〜三六・三糎（第七葉のみ七・四糎）。  
紙質は不規則、美、柔軟、鼠褐色。かびのしみあり。原補  
修あり。〔紙高廿八・九〜廿九・五糎×全長五〇八糎〕

二〇〇五 〔沙州都督府圖經〕〔卷三〕首欠。本書の標題はP  
二六九五の卷三断巻末に見える。

〔複製〕鳴沙石室佚書第一号、一―廿六葉。〔録文〕敦  
煌石室遺書第一冊、標題沙州志。那波利貞、史林廿一―四、  
七八九―九〇頁、史学雜誌五四―二、一五三―七頁（部分  
録）。〔参照〕莫高窟石室秘録第三葉。敦煌古籍叙録一―三―  
七頁。 Pelliot; Le «Chia tcheou tou fou fou t'ou king»  
et la colonie sogdienne du Lob Nor. JA 1916, I, p.  
111-23.

四断巻接合 ①一―九一行、②九二―一一四行、③一―  
五―四四八行、④四四九―五二三行。

書写、注意深く文字はかなり小さくつめて書かれる。避  
諱、隆(隆)・其(基)、民は人、虎は武でおきかえ。若干の  
補記と訂正あり。全五二三行。毎葉廿三か廿四行、毎行十  
二〜廿字（行の上部は空白、字面の高さ十二・五〜十七・  
二糎）。上方余白一・八〜三・六糎、下方余白一・二〜一・  
九糎、糸欄、野あり。

（紙背） 1 帰義軍の官人らくがき（第十九葉第二行の背、  
青墨）。 2 〔瑞應圖借與下〕全六字（第五葉の背）。

全廿二葉、うち廿一葉は幅四一・九〜四三糎（第一葉は  
破損、右方下端欠失。第三葉は四〇・一糎、第廿二葉は紙  
端斜めに切断）。美紙、しなやか、黄土色、かびのしみあ

り。「紙高廿七・三〇廿八・六種、全長九三五種」

王目の「南海寄歸内法傳卷第一(全)」、「沙州都督府圖經(殘存四段)」という簡単な一行に比し、まことに詳備を極めている。既刊の目録中では最もくわしいレニングラード目に比しても、一層周到である。但しレニングラード目にある首行・末行の移録は殆どない。機械的にそれを録す必要を認めなかつたからと解され、有用の場合(例えば二四八一背など)は毎篇の起・止を掲げている。特に所蔵機関でなければ確かめ難いスケール・紙質・紙色や紙背のらくがき等に至るまで細大もらさず注記されている点は、本目の価値をたかめる。

内容の比定・解説においても本目は既刊諸目に比し甚だ周到であり、もとより古逸仏経や道経等比定未了のものもあるけれども、ペリオ・王目に比べ格段の進歩を示している。それには編者両氏の学殖と労を惜しまぬ検索があずかっていることはいうまでもない。神会語録の校訂註や寺院経済文書の包括的研究で優れた業績を出されたスケールの大きい歴史家のジヘルネ氏と、諸言語に堪能で且つ仏教・道教資料に精通し二十年来ペリオ文献と取組まれてきた非凡な文献学者である呉其昱氏のコンビは、その威力を本目で遺憾なく發揮している。両氏をはじめ関係スタッフ各位の努力とその背後にあるポール・ド・ミエヴィユ教授の卓越した指導に対し、心から敬意を表したい。願わくは五乃至六冊の継続刊行予定がすみやかに実現し、中国中古写本目録の一大金字塔の完成を見

る日の一日も早からんことを。

なおペリオ本を中心に敦煌資料を集成したファクシミリ(解説を伴う)のシリーズとして、呉氏編の「太玄真一本際経一(一九六〇)に続いてドミエヴィユ・饒宗頤両氏共編の「敦煌曲」が最近刊行され、さらに呉氏による老子道德経諸本集成や古逸道経集録が準備されており、居ながらにして敦煌資料を遺憾なく利用し得る状態に近付きつつあることは、ご同慶の至りである。

他の諸目に比すれば、人員・時間に能事を尽くした本目に対しても、なお種々の注文を外からつける余地はあろうし、<sup>(17)</sup>少数の細部のミスは大仕事に免れぬ所である。しかし現状においては、むしろ既定の方針に従がい中断なく全巻の出版を急ぐことが、全世界の研究者への最大のサーヴィスとなるものと筆者は考える。

本目と切つても切れぬ関係にあるギニヤール夫人が、実は本年一月三〇日の早朝急逝された。前夜まで平常通り図書館の東洋写本室で執務されていたという。末尾ながら心から同夫人のご冥福を祈つて筆をおく。

注

- (1) J. Garnier, Les Aspects Économiques du Bouddhisme dans la Société Chinoise du V<sup>e</sup> au X<sup>e</sup> Siècle. (Publication de l'École Française d'Extrême-Orient. vol. XXXIX) Saigon, 1956, Introduction p. XII.



- (2) Furuda Akira; The Tunhuang Manuscripts. A General Description. Part I (Zinbun 9, 1966)p. 6.
- (3) P. Pelliot; Une Bibliothèque Médiévale Retrouvée au Kansou. (BEFEO VIII, 1908) pp. 505-7.
- (4) R. H. CLAPPERTON; Paper, An Historical Account of its Making by Hand from the Earliest Times down to the Present Day..... Oxford, 1934.
- (5) Marianne HARDERS-STREINHAUSER; Mikroskopische Untersuchung einiger früher ostasiatischer Tun-huang-Papiere. (Das Papier 23-4, 5, 1969/4, 5) S. 210-2, 272-6. 本論文は、キマン・ヤン博士の「敦煌記念堂」刊行物である(5-255頁)。
- (6) Furuda Akira; *ibid* pp. 16-7, 22, 27-8. 藤枝是「文字の文化史」(東京、岩波書店、一九七二)二三八—四〇一—一八一—四頁等。
- (7) Gabriel VIAL, Krishnā RINPOUD et M. HAULADE; Tissus de Touen-houang. (Mission Paul Pelliot, Documents Archéologiques Publiés sous les Auspices de l'Académie des Inscriptions et Belle-Lettres. XIII) Paris, 1970.
- (8) P. PELLIOU; Catalogue de la Collection de Pelliot, Manuscrits de Touen-houang. [No. 2001-3511, 4500-4521, 5522-5544].
- 藤枝是「巴黎図書館敦煌書目—伯希和氏敦煌将来目録」(国学雑誌一一四、一九三三、七二—七四頁、同三一四、一九三三、七三—七五頁)〔100—135頁〕。
- 陸翔訳「巴黎図書館敦煌写本書目」(国立北平図書館館刊七一六、一九三三、二一—二七頁、同八一、一九三四年、三七一—八七頁)〔100—135頁〕。
- (9) M. LALOU; Inventaire des Manuscrits Tibétains de Touen-houang Conservés à la Bibliothèque Nationale (Fonds Pelliot-Tibétain). Paris, vol. I, 1939; vol. II, 1950; vol. III, 1961. [No. 1-849, 850-1282, 1283-2216].
- (10) W. H. BAURER; Indo-scythian Studies being Khotanese Texts. Cambridge, vol. I, 1945; vol. II, 1954; vol. III, 1956; vol. V, 1963. [録文・註]
- (11) E. BENVENISTE; Codices Sogdiani. (Monumenta Linguarum Asiae Majoris, III) Copenhagen, 1940. [原文・註]
- E. BENVENISTE; Textes Sogdiens. (Mission Pelliot en Asie Centrale. Série in-4°, III) Paris, 1940 [録文・註]
- (12) 那波氏の調査に關しては、同氏の「仏・独・英に於ける敦煌文書の調査」(中外日報一九三三年八月)、「仏国秘

蔵の支那古文書」(徳島毎日新聞一九三三年九月)がある。  
なお近刊の史窓第三〇号(京都女子大学)那波利貞博士追  
悼記念特輯に、略年譜・主要著作目録・追悼記が含まれて  
いる。

(13) 王重民編「伯希和劫経録」(敦煌遺書総目索引)商務  
印書館編、北京商務印書館、一九六二、二五三—三三  
頁。

(14) 本目収載分にも二〇三(一)・二〇七(一)・二一五  
八(一)・二二六(一)・二二八(四)・二二八(一)・二  
二〇七(四)・二二二(三)・二二二(一)・二二八(七)・二  
・二三〇(一)・二三三(一)・二三三(五)・二四一(一)・二四一  
(二)・二四九(六)・二四四(一)・二四八(一)・二四九  
六(二)・二四九八(一)〔括弧内が頁の数〕と十八点に  
計五十一片の附片が登録され、その内容も仏経・道経の他  
官私文書やチベット文にわたる多様なものである。

(15) 本目収載分にも二一一(三)・二一一(一)・二二五(一)・二  
二二(一)・二四一(七)・二四一(五)・二四九(二)・二七五  
〇、二四三五(二)・二五九六、二四八九(三)・二四九  
〇、二四三五(一)等の例がある。

(16) 年紀の無い写本の大体の年代を、例えば七・八世紀と  
か十世紀という程度にでも可能なものは注記してあると一  
層有益と思われる(ジャイルズ目・レニングラード目に例

多し)。

又二四一三大楼炭経卷三には開皇九年四月八日皇后が敬  
造せる一切経なる跋を付すが、同文跋が仏説三曼陀羅經  
菩薩經・仏説甚深大廻向經(S二二五四)・仏説月燈三昧  
經(京都国立博)にもあり、二二九九大智〔度〕論卷五一  
は開皇十三年四月八日の李思賢の跋を付すが、同文跋が同  
論卷卅一(S二二七)・卅二(S五二〇)・卅四(S四五  
七)・卅七(S四九六七)・五十(S四九五四)・五三(文物  
一九五九一、三三三頁)・五八(橋)・六二(京都国立博)  
にも見え、二二四四華嚴経卷卅七に開皇十七年四月一日の  
袁敬姿の跋を付すが、同文跋が同経卷四(書道博)・九(S  
二五二七)・十五(橋)・卅(S六六五〇)・卅七(S四五  
二〇)・卅九(S一五二九)にあるなど、一具の写経に關  
する参照注記も欲をいえばあるとよい。なおこの類では二  
一一〇華嚴経卷卅五、二二四三大智度論、二一九五妙法蓮  
華経卷六については本目にすでに若干の注記が付されてい  
るが、なお藤枝晃氏の記述(Zinbun 10, 1969)二六、二  
九、三四頁等参照。

なお本書の価格は一九〇フランと聞かすが、この値段は舊  
感的であり、第二巻以降何らかの善処を当局に望みたい。

(17) 二〇九八跋、畫寶員→畫(Hua)寶員。  
二二五五→、李白萊→李百萊。

二三九二跋、<sup>△</sup>温熱→<sup>△</sup>温熱。  
二四八四—、戊辰年はA・D・九六八年に比定できるのではないか。

二四九二白氏文集、北京文学古籍刊行社刊「白氏長慶集」(一九五五)に影印を付す。

二四九四道憲楚辞音、周祖謨「漢語音韻論文集」(一九五七)四一八頁、同「問学集」上冊、一九六六)一六八—七六頁に影印と研究あり。

四〇〇頁<sup>△</sup>、二五二三—→二五三三

(Bibliothèque Nationale, Département des Manuscrits; Catalogue des Manuscrits Chinois de Touen-Houang [Fonds Pelliot Chinois], vol. I, Nos 2001-2500. Paris, Bibliothèque Nationale, 1970, XXXII+406p, Pl. XXIV p.)

ジャン・シエノー編

## 一九・二〇世紀における中国の人民運動と秘密結社

鈴木中正

中国の秘密結社は人民の王朝権力に対する反抗運動と深い関係をもつため政治上極めて重要な意義をもつのみでな

く、それが同時に宗教組織であり、又相互扶助或いは自衛の爲の組織でもあつた点で宗教や社会の諸側面とも深い関係をもちが、さうした結社が後代に残した資料が乏しく、又官僚士大夫層の手になるものは一方的に歪曲されているため、的確な事実をとらえにくく、従つて学問的研究は後れがちである。こうした中でここで紹介する著作はこの分野に関する貴重な業績であるが、二十三人の著者による二十三編の論文を集めたもので、著者毎に見解や評価に関する差異がみとめられるので、普通の紹介以上に紙数を費すことを許されたい。

序文によると、本書成立の出発点は一九六五年リーズ大学で開かれた第一七回ソナ学国際会議の折に中国の秘密結社に関する集会がもたれたことにあり、パリの高等研究学院(第四部)でこのテーマに関し二回の会議が開かれ、一九六七年ミシガン大学における東洋学者国際会議の近代史部門の一集会でも本書の執筆者の多くが意見交換の機会をもつた。それにも拘らず一同が一貫した見解をもつには至らないが、しかしこの問題に関する一つの研究業績を提供するのだとのべられている。以下順を追つて内容の大略を紹介する。

1、ジャン・シエノー「一九・二〇世紀の中国の歴史展開における秘密結社の地位」は、一九六五年に「一九・二〇世紀中国における秘密結社」という専著を出した同氏が本書中の諸論文の論旨をふまえた上でまとめ上げた総括である。最近